

思い出を語る



創立三十周年を祝して

初代校長 大田正吉

歲月人を待たず、光陰矢の如し、富野校が創立して三十有余年を迎えることになりました。十年一昔と云いますので、創立は三年前のことになります。創立準備から六ヶ年勤務した、あの頃あの時のことなどを思うと実に感慨無量であります。八重山群島政府は裏石垣の振興施策として、富野に学校設立を決定し、一九五二年二月二十五日に、川平小学富野分校設置認可となりました。当時終戦後のことであり、道らしい道もなく、マラリヤは猛威を振るい食糧の入手も至極困難であり、電信電話はもとより電気水道施設等皆無であり、教員宿舍もない状況でありましたし、富野の地名さえ世に知られていない時代でありました。そこ富野校へ私に反対する妻や親類友人の意見を押し切って、悲壮な決意で赴任いたしました。辞令は次の通りです。

八重山川平小学教諭に任ず

月俸三、二五〇円給与

八重山川平小学校富野分校勤務を命ずる

八重山群島政府

さて同年四月二十九日開校式を挙行することになりました。教師は私一人で小使も誰もいませんでした。開校当時のことが五周年記念誌に次のように記録されています。………ささやか乍らもいとも厳肅に開校式を挙げました。当時在籍全校で七名全疏で最も小さい単級学校で、来賓もわらじ履き地下足袋姿の山越えとあって少ないばかりでなく、来賓も丸太作りの長椅子で応接した状態で世間には余り知られずして開校したのであります。富野部落民の感激はひとしお深く、老幼男女総出の盛典でここに富野校は歴史的第一步をふみ出したのであります。………

その後米原開拓団の入植で児童生徒は急増し中学校も併置され、二部授業や仮教室の建築等両部落民の御協力によって学校施設も年々整備されました。更に歴代校長先生や教師児童生徒が一体となって御尽力されたお陰で学校は発展いたし、すばらしい今日の学校になりました。誠に喜ばしいことであります。あの頃の子供らはよく学びよく働きました。道らしい道もなく自転車など縁のない生活でしたので先生方や村の人も重大用件のない限り、土曜日でも四ヶ字に出ませんでした。それで結局、放課後は時にはおそく迄先生達は課外学習に校内美化作業に読書や遊び等々、子供らと触れ合う機会が多く親愛度も高く親子兄弟のようでした。又、父兄ともひざを交え語り合う機会も多く学域の生活は総じて家庭的雰囲気であり、苦しい中にも楽しく六ヶ年も勤続することが出来たのです。あの頃の子らは今、社会に中堅人物となつて、各界に大活躍しております。誠に頼母しく心強い限りであります。さて創立三十周年を記念して数々の事業が計画実施せられ、教育環境が格段充実いたしました。学校教育振興の為慶賀のいたりで

あります。環境が人をつくると云われております。よい子の皆さんはこのすばらしい環境で、しっかり知識を研き体を鍛えて社会の為になるよい人間になって下さい。校風の質実剛健勤労愛好のたくましい精神で頑張ってください。

富野校の御発展をお祈りいたします。

次にあの頃の思い出を笑々

※ 暗くなっているのに

ある年上学生は山越えの遠足をいたしました。日が暮れて暗くなっているのに帰校いたしません。帰路迷い道をしたのです。

学校も部落もそれは大変な心配でしたが無事でした。

※ 山監守小屋の生活

単身赴任した教師は教壇実践を語る同僚もなく宿舍もなく、市役所の山監守詰所にお世話になった時のことです。隔絶された暮らしは苦勞してお酒を入手いたし、一日の無事を感謝いたして語り合おうのですが、毎晩の様にこの酒にはボーフラがフラフラしていました。不思議なボーフラの酒も栄養になるとかで、さしつさされつ、山監守は一ヶ月交替勤務でした。

※ 陽（ひ）時計腹時計の授業

全く経験のない単級経営の授業は、海のものとも山のものともつかない、それこそ暗中模索試行錯誤の授業を大胆にやったものだと感じていた頃のことです。元気のよい子らがあばれ回ってテーブルの私物目覚し時計を落として大破損、交通事情も悪いのでしばし時計なしの授業続行ノ時間の測定は陽時計太陽の位置を見る法、腹時計胃袋と相談する法、疲労時計は疲労度の感知法で日課を完全に消化いたしました。

※ 憂うつな土曜日

今の先生方は日曜日のレクやレジャーの計画等でお楽しみの日曜日でしょうが、あの頃の生活のすべてと云ってよい程生きる以外の計画しなく、日曜日になると家族全員が山越えをして甘藷買いに伊野田に行くのが日曜日の行事でした。ああ明日は日曜日かと、土曜日の昼頃から憂うつになりました。

※ ハブと同居生活

あの頃マラリヤ蚊を防ぐ為に、各戸蚊帳は強制的に吊るようになっておりました。初夏の季節のある日、寝床を離れると頭に異様なものが触れるので見上げるとこれはいかに、一メートル位のハブが蚊帳の四つ角にはい上ろうと一生懸命だが、ハブの重量で蚊帳の中央部が低くなり、なかなか上りきれません。蚊帳の吊ひもを一つはずすとゆっくり流れるように下りてきます。この野郎と一撃、物騒な朝のひと時でした。これは住宅が堀立カヤ葺でしたのでハブが自由に出入りができ、夜中タル木から蚊帳の上に落ちたものと考えられる。

思い出の記

二代校長 大 浜 孫 佑

私が富野小学校に赴任したのは、昭和三十三年四月でそれから三十八年三月迄の五年間でした。今から二十五年前で追憶の糸を

たどると、パノラマの様に次々の事が浮かんで来ます。

学校環境美化しようと中学生先頭に職員も一つになって、雑木草を切り払い明るくしたら、当時の群馬政府の衛生課から環境衛生賞として柱時計一つを貰ったのが喜びの始めであった。

運動場拡張整備三ヶ年計画にPTA、部落総動員であったり、学校環境づくりで学校周囲の伐採作業、学校美化作業、学校パインづくり、学校林づくりで伐採植え付作業、発電機小屋造りで太田部落海岸でのバラス拾い。どれが先か後か今では記憶も確かでないが、頭の中にはっきりと残っています。そうした労力で運動会に必要な録音機、発電機それからピアノを購入し備える事が出来て学校は大変助かりました。生徒も学校美化に自主的に美化コンクールを持ち、色々の草花の色を学校に添えるようになりました。僻地学校の研究県指定校となり、職員も一生懸命で県の指導事と宿舎で六名の職員が夜おそく迄、研究討議していることを聞いて部落の主婦達が夕食を奉仕して貰い、職員も県指導主事も感謝し夕食を取った事が思い出されます。

狭く古くなった瓦葺木造校舎を視察に見えた文教局長に増改築を強く願ひ出て、それが入れられれ校舎入札の時で大丈夫出来るよとの教育長の言葉に富野に飛んで帰校したことが鮮かに思い出されます。

新校舎の出来る間の仮校舎造りは部落全員が山から木材を切り出し、かやをかってきてつくるのでした。

台風で倒れたらまたつくると言う様に部落の人が校舎づくりで大変力を尽くして貰いました。学校、PTA、部落、一つになっての学校づくりでした。部落の人はほんとうによくやって貰いまし

た。

今日を閉じると、学校のあれ、これ、部落の人々の顔が浮かんで来ます。力を尽くして貰った方々で、すでに鬼籍に入った人も懐かしく浮かんで来ます。また本島に、市内に移られた人もおられる様です。皆んななつかしい人々です。

今度三十周年で校舎も立派に改築になりほんとうにおめでとうございます。これからも、ますます未来の栄光の道へ美しい歴史をつくられんことをお祈り申し上げます。

字数に限りがあつて意をつくす事が出来ませんが、ただ順序もありません、思い出るままつづりペンを置きます。

想 出

四代校長 仲 本 正 貴

富野小中学校の創立三十周年の記念式典を挙行されるにあたり記念事業の一つとして記念誌の発行を計画なされ、旧職員の私にも感想を載せてもらうことになったことは私にとって誠に光栄に存ずる次第であります。同じ八重山地区の教職にあり乍らはまだ本校の校区やその実態について全く未知のものでしたが、赴任してはじめて地域の実態を知ることが出来、地域における生活の実態や教育の実情を知る事が出来たのである。

米原部落、富野部落、太田部落の三つの部落があり、そのいず

れの部落も殆どが八重山出身以外の方々の集団であることを知ってびっくりしたのである。米原部落は沖繩本島の読谷村出身者の集落であり、富野は川平の二戸か三戸以外は宮古出身の人々から成ること、又太田は黒島出身や竹富出身の者もあったが、沖繩本島や宮古出身の人々であることもようやくわかるようになった。

大正十二年石垣小を振り出しに昭和四十七年復帰の年の四月に勸奨退職で四十八年間の教職生活最後の学校でしたので印象深いものがある。その一つは赴任がおそくなって父兄の二、三名に咬みつかれたことである。それはその年の人事異動発表がおくれたためである。その理由の一つは県当局の決断のおくれが地方の委員会にまで影響してのことである。勸奨退職者の数が予算関係で決定するのに暇だったことともう一つは登小の七町内の児童の一部が平真小への分離問題が当局の予想どおりいかず手間どったあげく実現しなかったことである。そのため人事異動も発表が遅れ各学校の始業式はすべておくれ四月十日か十一日となったのである。急いで赴任した富野校は、校長はじめ教頭その他の職員も殆ど転勤で唯一人教諭が残留したのみでした。新任の校長はじめ他職員が当惑したのは申すまでもない。幸いに私には父兄の中に昔の教員関係がいて、私に同情し激励してくれた事である。暗夜に灯を得た感のしたことも無理はない。又その間に一般父兄も次第に事情を理解するようになり、同情するものも数多く出てきたのである。父兄が最も関心を寄せたのは中三の生徒をもつ父兄の来学年の高校入試の心配であったように、父兄としてむりもないことであろう。誠意は通じ日一日と職員と父兄の間にも心温るものを感じることがようになった。

毎年の学芸会、運動会はもとより父兄の協力は並々ならぬものがあった。太田部落の菊地氏は、毎朝夕の部落出身の子どもらの登下校を自家用車で送り迎えしてもらったのである。このことは私の脳裡に未だにはなれないものがある。新校旗樹立のために伊波亀吉教諭が努力したことや運動場拡張のため校長自ら、ブルト―ザー借入交渉に奔走したことや中三卒業生の就職のためあらゆる面で面倒をみてもらった崎山用昭教諭や給食のため献立はもとより炊事にいたるすべてに苦労してもらった女教師の喜舎場則子大浜久江、上原美代先生らの功績は実に大きいものがある。又唯一の残留組でした波照間英太郎教諭の新任職員に対する世話役の功績も忘れてはならないものである。特に毎年の高校入試には判を押ししたように志望者は全員合格であることを前校長那根亨は吹聴しておられたが、私の時代になってもそれは同じでした。又、社会教育にも夜間を利用して努力しました。三ヶ部落の青年婦人を学校に集めて成人教育を開設したのである。

又本土就職者の出発が卒業式前にあるため、二、三名の生徒のために特に卒業式を挙げて壮行を祝ったことも今は思い出の一つである。今や時代の波は石垣島のどの地区にもひしひしと押しよせ、富野校も今や過疎の波に抗し得ず僅か数名の生徒となっているが近日中午に在籍を増し三、四十人の在籍になるとのこと喜びにたえません。生徒のみなさん父兄のみなさん、なつかしい富野小中校のため自重自愛なされ本校が愈々栄光の道を辿りますよう念じて筆をおきます。

子どもたちはおもしろがってはしゃぎたてる。親たちは心配していつ渡れるとも知らない向う岸に交代々々で来て立っている姿は暗やみの中にタイムツで確認出来る。

午後十一時頃になってようやく干潮になり、海岸から渡った。このようなことは何度かあった。目をとじて見るとあの時の事が次から次へと色々な事が思い出されてくる。何を書いたか、まとまりのない文になったと思います。願わくば、創立三十周年の記念事業を一つの飛躍台として、一層充実し、伝統に輝く立派な学校に発展されたことを祈りつつ、想い出の記を終わります。

富野校に思いを寄せて

大田 千枝

私の今迄に一番思い出深い事は今を去る三十年前昭和二十七年の春の頃でございました。それは主人が富野校へ転勤発令を受けたからでございます。あの頃の心配と不安は今でも尚記憶に残っています。富野という部落が石垣島にある事さえ知る人の少ない時代でありました。戦後石垣市内でさえマリアの為に幾多の人命をうばったマリアを思い起こしマリアの恐怖症になっていた時代でありました。未開地の子供等の教育の為でも命あつた物種だと有病地希望して行こうとする主人に徹頭徹尾反対して先輩や友人親類にもお願いして思いとどまるよう手を打ったり致しま

した。しかし、其の意思をまげさせる事は出来ませんでした。一度決意したことについて動かすことのできない主人の性格で泣く泣く転任支度をやらねばなりません。いざとなれば皆々様が未知な国にでも行くような気持で盛大な壮行会を催し激励して下さいました。あの当時学童は親類の家からとの城校、川平校、白保校等に通っていましたが、富野校創立で子供等は暖かい親の許に帰り楽しいわが家から通学することが出来たのです。あの頃の富野校は山の中で小さな十六坪の一教室に全校生徒七人、先生は一人でした。開校式及び引き続き祝賀会があり親子の感激と喜びは想像に余りあるものでございました。先生も一人小使いも給仕も先生が兼ねるといふ世にも稀な学校でありました。其の後長男も次男も転入学させました。それから山の生活が始まります。最初困難にぶつかったのは食生活でございました。芋を沢山植えても猪を喜ばすばかりで部落民は張り合いのない気の毒な生活をおくっていました。沖繩本島より開拓団が入植して隣に米原部落が建てられました。矢張り同じ猪と知恵比べの毎日でした入植で来た以上どんな困難にでも克服する為共同作業に余年なく一生懸命働かれました。両部落民食糧難と戦い乍らも子供の教育には格別熱心で学校の作業に根気よく頑張って頂いた事には感謝感激で頭の下る思いでございます。

入植なされた知花先生と二十数名の生徒が登校するようになり拍手で迎えて喜びました。米原の生徒は毎日元気で先生と共に急ぎ足で登校なさる勇ましい姿が見えるようです。女生徒も増え、家庭科の重要性を感じ、及ばず乍ら私が共に学びつつ、担任する事になりました。オクデンさんからミシンを贈って頂き一段と喜びの

うちに活気が見える様になりました。学芸会は楽器一ツなく手拍子でリズムに合わせてダンスや遊び等致しました。

創立始めての運動会は入植当時の経済事情もあって現物寄付と話し合い計画実施を致し賞品は校区民手づくりのゴザ、ざる、野菜等でありまして開拓の苦勞も忘れた楽しい一日でございました。文教部職員数名が前日からお泊りになり、発電気マイクの音楽放送で山中の大運動会の雰囲気を感じ上げて下さいました。

或る日、庭園で女生徒がお友達に蹴で腕を切られ青ざめていました。学校には急救薬品不備でしたので強力の殺菌力のある「かまど」の上のススをかき集めて傷の上にかぶせて包帯してあげました。思えばあれから三十年あの頃お世話になった皆々様方に感謝致し富野校の御発展を祈念し富野校の思い出と致します。

思い出の記

山田 恵子

富野校に赴任したのは、昭和三十三年四月でした。もう二十五年も前のことです。二年間の助教諭の後、二年間退職をし、再び同一校へもどり二年間をすごしました。通算四年の勤務の中にはいろいろなことがありました。

校長は大浜孫佑先生で、筋金入りの名校長でした。公的には特に厳しい性格の方で、助教諭のわたしにとって有難いめぐり合わせだったと思います。

何の前ぶれもなく、教室に入って授業をみていかれる。それが五分や十分ならいいが、時には一時間もみていかれる。教材研究も浅く、授業の展開にも慣れていないわたしは、いつも戦々恐々であった。放課後きままって教科書をもってくるように校長に呼ばれる。「きょうの指導は自分で、何点ぐらいと思うか」「あの発問のとき児童の反応はどうであったか。」

わたしの答えは無である。「あんじる発問やるかあ ばぬやらばんばがらんばんゆ」。(あんな発問だったらわたしだってわからない)といわれる。恥をかき面の皮を何度もはがれた。さんざん言われて、泣いて顔が上げられなかったこともある。

また、教育原理を説いてもらったり、参考図書を購入して、研修に励むようにと、すすめられたこともあった。

新前のわたしにとって、ことに将来教職を全うしようと思っていたわたしにとって、毎日の一つ一つの言葉が、尊い有難い言葉であったと折にふれ思い出している。

職員に通勤者はなく、日曜の夕方のバスで富野に行き、一週間勤務して、土曜の午後のバスで四ヶ字(新川、石垣、大川、登野城)の自宅に帰る。

校長は、職員会議に提案されたいことがあると、曜日や時を問わず職員を招集された。それが夕方であったり、日曜の午後であったりした。合図は薬きょうの鐘で一点鐘である。わたしは、富野の仲本家に宿をとっていたが、学校の一点鐘は、澄み切った空気をつつ切って部落まではっきり聞こえた。一点鐘が聞こえたと大急ぎで身支度をして、学校へ出かけた。会議は夕方おそくまで続きよいやみがせまれば、ランプに灯がともる。

その頃から食飲会へと変わる。そこで、思い出話や経験談がかわされ、歌がはじまる。歌謡曲、学校唱歌を心ゆくまで歌った楽しい雰囲気、なつかしく思い出される。

校区は、東に浦底（当時大田となる）富野、西に榊海、米原部落があり、教育熱の盛んなところであった。富野には旧榊海の原住者が何げんかあるが、戦火をのがれて東原（富野）に移り住んだそうである。

一帯は、肥沃な土地と豊かな水に恵まれ、最適な農業地域である。

一九五二年に、政府から強制移住をさせられた形でこられた方々が、米原、榊海部落をつくってもらったが、おかげで、学校の児童生徒が増え、働らく場のもてたことは、有難き幸せでした。

児童生徒の数は百余名で、わたしが担任したのは一年目、一、二年複式で二二名。二年目、一、二年で二四名。三年目は三、四年で二七名。何と四年目には、一年二一名と二年十名の三一名複式を担任していました。職員は校長、中学に男子職員三名、小学に男子職員一名女子職員二名、用務員を入れて総勢八名でした。

運動会シーズンになると、太鼓に合わせて、校歌ダンスや行進の練習をした。昔ながらの蓄音機で78回転のEP盤、レングのかげらに蓄音機の針をといでの練習である。

運動会の当日になると、もっとてんやわんやである。その学年の担任は指揮をしているので、残った者がひとり何役もしなければならぬ。レコードをかけ、ぜんまいをまわし、次のために針をときながら、その演技が終わるまで緊張であった。

子供の数に比べて校地は広く、グラウンドや周りの草はしばらく刈りないと大へんのびた。分担区を何日かで刈り終わった頃、

初めに刈りた所は、もうのびている始末である。

校長は環境の美化にも力を入れておられた。グラウンドの東は大きな窪地は初めは農場であったが、運動場拡張のため計画的に埋め立てられ、周りの木も切られた。その作業にPTAを動員したのはもちろんだが、児童生徒の労力も多大であった。校庭の南西側の傾斜地の木も切りはらわれ、その原野にクロトン、カンナ日日草等が植え込まれ、その花が咲いた時、緑の中で花の色がひときわはえ、バスの窓からのながめをたのませてくれた。

座喜味朝春老人が、富野の東サラ浜ののぼり口に住んでおられた。沖繩本島の方で教養人であった。水くみに富野の川までこられ、そのついでに学校に立ち寄られた。自分の作られた野菜を、学校職員へと差し入れてくださった。また、アダン葉ぞうりをつくり、児童の室内ばきにと、何十足も提供してもらった。有難い贈り物を子供達は、よろこんではいた。下校時には机の下にきちんと並べてかえた。その頃沖繩の新聞に写真入りでその記事がのり、学校がクローズアップされたことがある。

当時教育隣組が盛んであった。米原にみどり組、あすなる組、あけぼの組、富野に竹の子組の朝日組、太田組と六つに分けられた。遠くへは男子職員、住宅近くには女子職員が配られた。

わたしは竹の子組の担当で、父母の組長は、宇根一男氏であった。隣組集会の日、夕食をすませて子供たちが集会場所（民家）に集まる。集いの歌を歌い、話し合いが始まる。話の内容は、もっと家庭学習をしようということ。「本を大きな声で読む」。

とか、「漢字計算等の予習復習をしよう。」等であった。その後

レクがあり、終わりの歌となる。今もあの時の子供達の目を忘れない。電灯もなく薄明りのランプの下で顔をつき合わせ、楽しい集いであった。当時の子供達は少なからず、話し合われたことを実行にうつしていた。

四年間の勤務の中でも、三年目に持った四年生の男子の中に、ヤマングーが何人もいて、ケンカをしたり、わたしに反発したりで毎日泣く思いをした。その子たちは今、どこで、どうしているのだろう。たぶん、よき社会人になり、よき家庭生活を営んでいるのであろうと思う。

昔から富野（梓海）は、人情豊かな土地で、修学旅行生を迎えるために、おみやげのもちつくり婦人が徹夜をしたり、旅の客に、心よく食事をもてなしたりした。

また、移住してこられた方々も人なつっこく、勤勉な方達で子弟の教育にもよい影響を与えて下さった。

旧梓海は、わたしの両親の郷里でわたしが生まれて五才まで育った土地でもある。教職のかけ出しに勤めさせていただいた富野小中学校が、創立三十周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

子供達が 笑っている

山が笑っている

川が笑っている

空が笑っている

海が笑っている

三十周年 おめでとう。

子供達が 歌っている

お父さんお母さんが拍手とる

山が 川が 空が 海が

そして学校が 拍手とる

三十周年 おめでとう

富野小中学校の、限らない発展を祈りつつ、

猛牛の校庭侵入

波照間 英太郎

富野校へ赴任して二年目の何学期であったか定かでないが、多分、午前の十時頃だったと思う。運動場には、少々の緑がぼつぼつ生えていたことを覚えている。

ある日、そこへ猛牛が突進しとびこんで来た。その時はちょうど休み時間で、子どもたちの遊び声が広場のあちこちに散ばり、にぎやかに聞えていた。突然、歓声とも悲鳴ともつかぬものが運動場の南東方から起り、西へ移動した。見ると、角をふり回し、しっぽを逆立てて猛牛がとびこんで来るのではないか。この様子では、子どもたちの誰かがあぶない。私は、とっさに運動場に飛び出し、けなげにも猛牛と対決していた。猛牛との間隔はじりじり迫り、突風が猛牛の鼻穴から吹き荒れた。私は威力(?)に憶したのか、あるいは、異様なものの突然の出現にとまどいをおぼえたのか、目をむいたまま、ぴたりと止まった。

十数秒が過ぎた。子どもたちは、教師が教室へ収容したらしく背後に静けさを感じた。その時、私は自分のまる腰に気づいて背すじに恐怖をおぼえた。山奥での仙人と猛虎との対決や、スペイン闘牛士の奮闘ぶりが頭の中を駆けめぐったものの、少しも動け

ない。格闘にでもなれば、猛牛の角の前にひとたまりもないことはあきらかである。私は、猛牛の眼球を疑視しながら、子どもたちも教室へおさまったし、もう危害はないはずだから、この辺で引き下がっていいではないか。逃げる方法に思いをめぐらし、自問自答をくり返した。しかし格好がつかない。全児童教師に注視されている意識から、なかなか解放されないのである。猛牛の不動がその意識をますます強くし、全身を金縛りにしていた。

時が秒を刻んだ。あせりながらも、猛牛の動きをじいっと待った。にらみ合いの続く中、猛牛の動きをじいっと待った。にらみ合いの続く中、猛牛の眼球から狂気と闘志がかすかに消えてゆく気配がした。

その時である。硬直している私の左後方から、仲野君（たしか中学一年生だったと思う。）がすたすたと小走りに来て猛牛の右後方に回り、三メートルほど猛牛の鼻についていた縄をぐいっと引いた。助かった。私は中学生に救われた。猛牛は、仲野君に引かれると、たわいもなくもとのただの役牛と化し、ひょっこりひょっこり連れ去られた。

私はふるえの止まらない足をひきずりながら、自分の滑っけいな様を思いうかべ教室へもどった。

富野校に五年間勤務していたが、離任後十数年を経た今、次第に記憶の薄れてゆく数々のできごとの中で、この猛牛との対決は忘れられない思い出のひとつである。

雨の日は、山々のあちこちから水があふれて沛然と雨の煙に一つまれ、晴れの日は、樺海大岳がすぐそこにそびえ立ち、足もとの谷間を流れるせせらぎや、小鳥のさえすりを奏でる学びの里富

野校。

そこへ、西は荒川の近くのほうから、東は太田部落のもつと向うから通いつめ、結集した子どもたち、今にしておもえば、開拓魂に身を固めた熱心な父母、すなおで明るくたくましい子どもたち、お世話いただいた先生方、いずれをとってみても、良い環境に恵まれた富野校在勤の五年間であった。

やがて、おもとトンネルも開通するという。過疎化の波を吹きとばし、あの頃のにぎわいをもう一度取り戻せるよう、富野校の発展を祈るものである。

こじんまりしたすばらしい学校

富野校での一年生

池城 安祥

赴任してまず驚いたのは、学校が小さいことだった。小さな、古びた建物が三棟、背後はうっ蒼とした林で、その事が学校をさうらに小さく見せた。全校朝礼で並ぶ生徒の少ないこと。前任校が七百人余の生徒であったので、富野校の生徒数の少なさには、「あれっ、これっぽっち？」と、何とも複雑な気持ちになった。

生徒達は純朴であった。時折宿舍のホールの柱の陰から、ゴムゾーリを履いた低学年の子どもがこちらのほうを息を殺して見ている。田舎の子供らしいと思った。自分の子供時代と同じであった。都会ずれのしていない子供たちを見て、ほっとする共に、涼

想い出すままに！

知花義信

富野小中学校の創立三十周年にあたり、心からお祝い申しあげます。学校の施設々備をここまで充実発展させていただいた学校当局、PTA、地域の皆様に心から感謝申し上げます。

本校は昭和二十七年の四月に裏石垣の山の中に十六坪の瓦ぶきの小屋が建てられ、七人の児童と一人の教師（太田先生）によって、川平小中学校富野分校として悲願の開校式を迎えたのであります。そういう所へわたしは、開拓者の子どもを引き連れて勤務することになりました。

一年生から四年生までは大田先生の担当、五年生から中学三年までは、わたしが担当することになりました。小さな建物で間仕切りもなく、大田先生は西側の黒板を使い東を向いて、わたしは東側の黒板を使い西に向いて授業する。児童、生徒は背中合わせ、教師二人は向い合わせ、わたしは教員になって三年目、太田先生は十年以上のベテラン教師、どうも庄到されて調子悪い、そこで天気のいい日は裏の大きなガジュマルの下で授業したことも度々あった。父兄にお願いし校舎を建ててもらうことになりました。父兄は開拓のつかれを休める間もなく山から木を切り出し二十四坪ほどの葺ぶきの校舎を完成し、それからわたしは、葺ぶき校舎

で授業をすることができた。わたしは中学三年生を中心に授業を進めた。何しろ入植してすぐ高校受験が待ちかまえているからどうしても中学三年生が中心にならざるを得ない。上級生は下級生を教え、下級生は上級生に習うというような方法で授業を進めた。子どもたちは学校から帰れば、木を運ぶなど開拓の手伝いをする。手伝いをすませて夕食をする頃には八時、九時になるのは普通である。それから予習や復習をする。日曜日といっても休むこともできない。主食である芋の買い出しに行く。個人の物ではなく団体の食糧買い出しである。わたしは中学生を引率して、山を越えて伊野田部落へ行ったり、川平や崎枝あたりまで行って芋を買い集め馬の背に乗せて運んできて各家庭に配るのである。子どもたちも大人と同じように疲れていた。ところが受験生の四人はよくがんばってくれた。四人揃って八重山農林高等学校に入学することができた。

当時は部落から学校までの通学路もなく、山の中、草原を歩いて通学した。子どもたちが学校へ着くまでにはほとんど毎日のようにびしょぬれになった。途中に深さ三、四十センチメートル、幅四、五メートルほどの小川のような佐久田良川が流れていて、ふだんは子どもらのいい遊び場であった。ところが雨期になると深さ数メートルの激流となり、どこまでが川なのかわからない。子どもらが登校する時何でもなかった川が下校時には渡るに渡れない。

家族が迎えに来て川の向う岸に立ち子どもらは学校側に立って声をかけ合うだけで、また、教室にもどり、机を集めて寝る準備をし、富野部落から芋をもらって食べさせた。

インのように感じられていくのだから不思議なものである。

校長さんも朝からよく働いた。夕べの酒が残るのか、玉の汁を手の甲で払いながら、草刈り、校舎周囲の堀積み、ハブ駆除、公害食品への警告等、いつも弁舌さわやかだった。音楽の研究校を引き受け、手さぐりで指導主事の講義に全職員耳をかたむけたのも私に教育のあり方を教えてくれた。「アンサンブル」とは何かと質問し、だれかが女の着物のことではないかと答え一笑されたのも私にとっては教育の大きな成果であった。

この度、校舎が改築され、三十周年という慶事にあたり思い出の徒然は尽きないが、ただ当時の職員に思いを馳せながら、次の一句を献じて富野校の発展を祈る。

「同胞よ、車座の里の すみれかな」

想い出の記

大田 綾子

離島校から、石垣島内へ転勤できた喜びを胸に、富野校へ赴任したのは、沖縄が本土に復帰した翌年の昭和四十八年の四月でした。

その当時の、石垣市の道路事情は非常に悪く、復帰記念事業の道路工事が盛んに行われ、富野までの通勤時間も一時間近くを要す等、学校と往来は、大変不便なものでした。

富野校での私の担当学年は一、二年生（三名）複式学級でした。

しかし、学年なかばから、二年生（二名）が転出し、一年生一人のマンツーマン学級になってしまいました。

四十分の授業時間は、一人の子にはあまりにもゆとりがありすぎて長く感じられ、どのように過ごせばよいのか、発表する場の設定をどのようにすればよいのか、頭を悩ましたものです。

幸いに、休み時間になると、学年を問わず仲の良かった上級生との遊びの中で、明るく伸び伸びと、学校生活を楽しんでいる様子を見て、安心し全校児童に助けられた思いがして、感謝の念で一杯でした。

二人きりの教室体験の中から、ある一つのことを思いつきました。それは、全校会食です。

校務分掌で、給食関係を見ていたこともあって、給食婦の知花さんに持ちかけ、職員会議に提案し、さっそく実行に移されました。当時、完成したばかりの技術室を食堂にして、献立は富野校スペシャルランチです。

せっかくの会食会を有効に学習の場として活用しようという提案も出て、全職員がそれぞれナイフ、フォークを持ちより、使用の学習も組み入れられました。

全児童生徒、職員がテーブルを囲み、慣れない手つきでナイフとフォークに挑戦し、楽しく、なごやかな全校会食もなつかしい思い出として残っています。

二年間の短い勤務期間でしたが、その間にへき地教育音楽研究校の指定を受け、正しい発声法と楽しく歌う子どもたちの活動を求めて、全職員で取り組んだことや、県へき地研究会の会場校として振った一日。

いました。こんな苦しみの中でもみんなはくじけずがんばりました。そして、第一回の運動会を迎えました。賞品は各家で作った物を持ちよったものでした。げた・アウダー・ナベのふた・アドンバヅウリ等、たくさん出て来て楽しい運動会ができました。

しかし、マラリヤ・台風・干魃という災害に会いにぎやかだった富野も一人減り、二人減りして淋しい村になってしまいました。あの苦しかった頃に、この学校をでられた皆さんも、もう大きくなっておられます。自分の出た学校を忘れないで、お子さんは必ず富野校に出して下さい。

富野のような小さい学校でも、高校には百パーセント合格してきたと思います。

最後になりましたが、大田先生、奥さんいつまでも長生きして富野校の発展をいっしょに祈って下さい。

創立三十周年を迎えて

分校第一期生 池原健昌

富野小中学校創立三十周年万歳！ おめでとうございます。

もう、三十年も経ってしまったのかと思うと、在校当時のことを思い出し、胸にせまるものがあります。

富野校の現在の状況は、残念ながらよく知りません。しかし、創立三十周年記念事業の趣意書を読んで見ると、その発展ぶり

が垣間見られます。

今日ある学校は、歴代の学校長や先生方等の贈物と思われ、今後とも止むことなく発展するものと思われれます。

私の最近の仕事におわれ、富野校のことは久しく考えてなかったが、創立三十周年事業の趣意書が届き、読んでいるうちに在校当時のことが思い出され、楽しい思いで書いています。

私は、富野校が川平校の分校であったときの卒業生です。記念事業期成会の副会長である比嘉次郎さんと同級生です。共に白髪等と悩む年令になってしまった。

在学中の学校は、粗末な小屋という感じの木造瓦葺き教室、木の切り株が残っていた運動場は狭く、鉄棒もなかった。

学校への通学道は、二人並んで通れず、ジャングルの道のように、朝露でズボンがぬれる毎日、又、雨になるとスクダラから渡れず、立ち往生していた。今思うと、めったに得られない体験だったと喜んでゐる。又、先生方には教材等不足のなかにあって、しかも、復式学級で学年の違うものを相手に私共をよく導いてくださった立派な先生方だったと、常に感謝の念でいっぱいです。

学校生活の中で、大きな思い出となっているもの一つに受験勉強がある。私は、中学三年の二学期に読谷村古堅中学校から転校して来たため、翌春には高校受験となっていた。志望校は、開拓者の子弟ということで、自然に農林高校と決まっていた。受験勉強をしなければならぬが、参考書らしいものがなく、大田先生が遠く離れた石垣の本屋等から揃えてくださった。

また、知花先生は放課後、水田管理用の田小屋を借り受けて指導に当たられた。今のような電燈とてないから石油ランプの灯りを

たよっていた。あの頃の夜食も忘れられない。主にソーメンチャ
ンプルであったが、たまにはフーダに行きうなぎ等を捕り栄養
食にしていた。このように親身になってくださった先生方のおか
げで、全員高校に合格できた。

今思うと、先生方の指導は、日頃から自主独立のできる人間に
なれる教育であった。教材らしいものが全くない学校を卒業して
いるが、卒業生は皆切磋琢磨し、今日の母校の三十周年に参加し
ているが、学校に対する愛情の現われと思われます。

富野校は今でもそうだと思いますが、恵まれた自然環境がある
生徒は素朴で純真が保たれている。

更に、当時は先におられた富野の方、特に故砂川茂太郎さん等
の暖かい心遣いもありました。

私は仕事柄、那覇市・平良市・名護市等に転居してきたが富野
校のような環境は少なく、時々富野校を思い出し心の清涼剤にし
ています。

創立三十周年を迎え、思いつくままに書いてみました。

今後とも、富野校の伝統、校風を発揚され、益々発展すること
を祈ります。



創立三十周年によせて

分校第五期生 上地 武俊

目を閉じて過ぎし三十年を懐古する数々の思い出は過日のこと
し。友達と登ったオモト岳の峰々、うっ蒼としげる樹海、小鳥の
さえずり、うだる暑さに蝉時雨、三十年の歳月は山野を駆け巡る。
嵐になると山の樹が騒ぐヒューヒューと音をたてる山嵐。山の気
嫌もかわりやすい、ヘソまで靄に覆む山、子供達は山彦を呼ぶ。
しかし、山は鷓鴣返し of 返事だった。

さら浜の砂あくまでも白く、いつも素足の子供達、継ぎはぎの
服をまとい、カバンは風呂敷包で小脇に抱えて走る。いつも飽き
ずにイモ弁当、ちよっぴりぜい沢してソーミンチャンプル、皆ん
な一諸に貧乏した。

一八五二年基要寒化さる沖縄本島から琉球政府の計画移民とな
る。土地を奪われし者への体のよい追いたてにのった。しかし移
民団に想像を絶する苦しみが待ちうけていようとは誰一人知る由
もない。移民船は木造の総排水量が僅かに五〇トン、船足も遅く
八重山まで二月を要した。丁度朝鮮戦争の頃と記憶しているが定
かではない。

その後、時を経て八重山丸も航行中に時代のため沈没したと聞
いて驚いた。

開拓団は運命共同体として意気揚々たるものを感じとった。密林を伐採して開墾する集団作業、毎日過酷なまでの労働に疲労困憊しても笑顔を絶やすことのない大人達、皆んな屈託のない顔だ。しかし意外なことで大騒ぎを引き起こすことになる。マラリアが猛威をふるい始めた。体力を消耗して抵抗力が弱まるとたちまちマラリアに罹患した。媒介するマラリア蚊はヤブ蚊と違い、人間に近づいてきても羽音をたてない、血液を吸う時尻を九〇度に持ち上げる。家族的にマラリア保菌者が続出した。保菌者になるとワラ葺き屋の軒先にその目印がかかげられる。真赤な三角旗が風にテンポンと翻っていた。真黄色のキニ―ネの苦味、皆んなして皮膚を黄色にした。

沖繩から持ってきた蓄えも底をつき始める。二、三年は正月を忘れる程貧困に喘いでいた。いろいろな仕事を手掛ける。道路工事の人夫、炭焼き、塩炊き、薪割、子供等にも労働させて耐乏生活の糧を求めた。食糧の買い出しも難渋した。村じゅうの馬が集められる手綱を取る子供達も一人前の馬丁として認められ嬉しい思いをした。ジャングルを抜け一路川平へと進む道すがら風光明媚な川平湾に感動を覚える。馬の跡めが砂にザクザクと音を入れると砂には息するカニ達が騒ぎ逃げまどう。何千万いや何億匹ものカニの大群は壮観としかいいようがない。そんな光景を今では目の当りにすることはない。

ロバのように小さい馬、鞍馬のように強靱な馬、皆んなして良く働く、帰途につく頃すっかり日が暮れた。闇夜のジャングルは深々と眠る。夜空の星が一ツも見えない樹海、ヒンチャー馬（荒海）をひく僕はしんがりに追いやられる。細長い一本道

のため先頭と後方では可成り間延びする。ポーホーとふくろうの鳴き声を背に浴びる。いいようなない恐怖を感じて馬の背で目をつむって耐える。すると誰かが大声で悲鳴を上げた彼は灌木にひかかって落馬していた。

通学路に川があったその川の名を思い出せないでいる。良く晴れたのはせせらぎでエビを取って遊ぶ。しかし一度大雨が降ればグングン水嵩を増し濁流が牙をむく、大人が汗して掛けた橋をのみこんだ。そんな時引き潮に合わせて海を渡る又、学校に泊るしかない、富野の皆さんが炊きだしのオニギリを配った。その味を今でも忘れない。

開拓団の入植で、生徒数も随分増えた。校舎も大人がつくる児童生徒も一生懸命働く岩石いっぱい運動場、ハンマーを振って石を砕くモッコ担いで土を運搬する。工事は遅々と進まない。そんな最中の運動会コースは仕上っても岩山が邪魔をする。走っても生徒が見え隠れする笑えない話もある。

太田先生、誰もが忘れ得ぬ教師として尊敬された。転校してまもない頃、富野校はジャングルの中に一軒の校舎が置いてある形容しがたい光景に啞然とした。しかし大田先生はそんな辺地校に赴任している。マラリアとジャングルとの闘いに憔悴する人々、貧困に喘ぎ苦しむそんな人々に勇気を与えさむ気持を子弟教育に向けさせた。

知花義信先生も苦勞をしまいこんで赴任している。

想像を絶する苦難の道程であったに違いない。大田先生、義信先生も指導的立場にあり内面での葛藤は私達が知る由もない。先輩達の進学で両親の説得やら夜を徹する受験指導、文字通り東奔西